

Ⅱ．調査結果のまとめ

1. 仕事について

1-1. 1週間の労働時間（問8）＜図1-1＞

■男性の10人に1人以上が週60時間以上働いている

残業時間も含めての1週間のおおよその労働時間をたずねた。

週40時間以上働いている割合は、女性37.2%・男性68.5%で、男性の方が約30ポイント高くなっている。

特に男性の場合は、「週60時間以上」の割合が12.6%である。これを年齢層別でみると、30歳未満、50歳代で高く、30歳未満では16.3%、50歳代では15.9%である。

1-2. 昨年1年間の税込み収入（問9）＜図1-4＞

■男女の収入差は大きい

昨年1年間の収入をたずねた。

女性の場合は、「103万円未満」が35.0%、「103万円～200万円未満」が23.4%で、年収200万円未満の割合は58.4%である。

一方、男性の場合は「103万円未満」から「1,000万円以上」まで7.0%～17.0%と各層に分散している。

「年収200万円未満」の割合を男女で比べると女性58.4%・男性22.8%であり、女性の方が35.6ポイント高くなっている。

年齢層別にみると、「200万円未満」の割合が高いのは女性の60歳代、70歳以上、男性の30歳未満である。

また、どの働き方においても、女性の収入の方が男性よりも低い傾向がある。

1-3. 仕事上でのストレス（不安や悩み）（問10）＜図1-7＞

■男女ともに「収入が少ない」ことにストレスを感じる

仕事の上でのストレスの度合いについてたずねた。

男女ともに「収入が少ない」（女性52.5%・男性59.3%）、「上司や部下、同僚との人間関係」（女性44.6%・男性44.1%）、「不況・解雇、将来性が感じられない」（女性41.5%・男性52.0%）の割合が高い。

男女で比較すると、「子どもや高齢者の世話などがあって十分に働けない」では女性の割合が高く、「不況・解雇、将来性が感じられない」、「労働時間が長い」、「収入が少ない」では男性の割合が高くなっている。

1-4. 職場での性別による対応や評価の差（問11）＜図1-16＞

■「管理職への登用」では、「男性優遇」と感じる割合が高い

働いている女性354人・男性342人に、今の職場での男女の対応や評価への差があるかど

うかをたずねた。

「平等である」よりも『男性』の方が優遇されている」の割合が高いものは、「管理職への登用」（女性26.6%・男性24.3%）だけであるが、その他に、女性の場合は「賃金」「昇進・昇格」、男性では「昇進・昇格」「採用数」において、「『男性』の方が優遇されている」の割合が20%を超えている。

一方で、「育児・介護休業などの取得に関して」は、『女性』の方が優遇されている」の割合が男女ともに10%を超えている。

1-5. 仕事をしていない理由（問 12）＜図 1-29＞

■男性は「定年退職」、女性は「家事や子育てをしている」が主な理由

現在「仕事をしていない」と答えた女性 359 人・男性 175 人に、その理由をたずねた。

男性の場合は、「定年退職した」が 49.1%で最も高くなっている。

女性の場合は、「家事や子育てをしている」が 19.2%で、最も高くなっている。ついで、「健康上の問題がある」、「定年退職した」「求職中である」がそれぞれ 10%台である。一方、「家事や子育てをしている」については、男性は 0%となっている。

年齢層でみると、女性の 30 歳代では、「家事や子育てをしている」の割合が他の年齢層よりも突出して高く 68.1%となっている。

1-6. 今後の就労意向（問 13）＜図 1-31＞

■就労を希望する割合は、女性は約 40%・男性は 50%弱

現在「仕事をしていない」と答えた女性 359 人・男性 175 人に、今後の就労意向についてたずねた。

女性の場合は、「ぜひ、仕事につきたい」が 16.7%、「できれば、仕事につきたい」が 23.1%で、それを合わせた＜仕事につきたい＞割合は 39.8%である。

男性の場合は、「ぜひ、仕事につきたい」が 18.3%、「できれば、仕事につきたい」が 28.6%、合わせた＜仕事につきたい＞割合は 46.9%である。

年齢層でみると、＜仕事につきたい＞割合は、女性の 30 歳未満で 100%、40 歳代で 83.7%、30 歳代で 70.2%である。

1-7. 就労に当たっての困ったことや不安（問 13-1）＜図 1-33＞

■男女ともに「年齢制限」が最も高い

現在は仕事をしていないが、＜仕事につきたい＞とする女性 143 人・男性 82 人に、今後仕事につく上で困ったことや不安についてたずねた。

男女ともに「年齢制限」（女性 54.5%・男性 43.9%）、「自分のしたい仕事につけるか」（女性 43.4%・男性 39.0%）、「自分の健康状態や体力」（女性 40.6%・男性 36.6%）の割合が高くなっている。

男女で比較すると、女性は「家事、子育て、介護との両立ができるか」を 36.4%が選んでいるものの、男性では 0%である。

女性の年齢層でみると、30 歳未満では「自分のしたい仕事につけるか」(72.7%)、30 歳代では「家事、子育て、介護との両立ができるか」(75.8%) が突出して高くなっている。

2. 日常生活や子育てについて

2-1. 日常生活における考え方（問 14）＜図 2-1＞

■「男（女）らしく育てる」「3 歳までは母親のもとで育てる」「妻子を養うのは男性の責任」という意見に肯定的な割合は 5 割を超える

子育てや介護、職場など、日常のさまざまな場面での男女の役割についての考えをたずねた。

子育てに関する設問での＜そう思う＞（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）割合は、「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てる方がよい」（女性 56.3%・男性 72.3%）、「子どもが 3 歳くらいまでは母親のもとで育てる方がよい」（女性 72.9%・男性 66.0%）、「妻や子どもを養うのは、男性の責任である」（女性 57.4%・男性 71.7%）と、肯定する意見が高くなっている。

「どちらともいえない」の割合は、「男性の方が女性より、管理職としての資質がある」（女性 44.1%・男性 42.4%）、「育児や介護、病人の世話は、男性より女性がする方がよい」（女性 42.1%・男性 37.3%）で高くなっている。

2-2. 平日の生活時間（問 15）＜表 2-1＞

■男女で、「仕事・学業」「家事・育児・介護など」時間に関きがある

平日の 24 時間をどのように過ごすかについてたずねた。

男女で違いの大きいのは、「仕事・通勤あるいは学業・通学」（女性 7 時間 54 分・男性 9 時間 30 分）、「家事・育児・介護など」（女性 5 時間 24 分・男性 2 時間 12 分）である。

年齢層別にみると、女性の 30 歳代では「家事・育児・介護など」が 7 時間 18 分であり、他の年齢層より大幅に長く、その一方で「仕事・通勤あるいは学業・通学」時間も 9 時間 30 分と最も長くなっている。

男性の 30 歳代、50 歳代では「仕事・通勤あるいは学業・通学」時間が 10 時間を超えている。

2-3. 暮らし方の希望と現実（問 16・17）＜図 2-7、図 2-9＞

■女性では、希望は多様だが、現実には「『家庭生活』を優先している」が最も高い希望する暮らし方と実際の生活についてたずねた。

希望の暮らし方をみると、「『家庭生活』を優先したい」「『仕事』と『家庭生活』をともに優先したい」、「『家庭生活』と『地域・個人の生活』をともに優先したい」、「『仕事』と『家庭生活』と『地域・個人の生活』をともに優先したい」を同じ程度に希望している。

しかし、現実の暮らし方では、「『家庭生活』を優先している」が最も高く 38.3%となっている。

■男性では、「『仕事』と『家庭生活』の両立」を希望する割合が最も高いが、現実には「『仕事』を優先している」が最も高い

希望では、「『仕事』と『家庭生活』をともに優先したい」(28.2%)、「『仕事』と『家庭生活』と『地域・個人の生活』をともに優先したい」(20.7%)の割合が高い。

しかし、現実の暮らし方では、「『仕事』を優先している」が最も高く 29.6%となっている。

2-4. 望ましいと思う女性の生き方と実際の生き方（問 18）＜図 2-11＞

■女性が望む生き方は、「就労継続型」と「再就職型」がそれぞれ約 30%

女性に、女性の望ましい生き方と実際の生き方についてたずねた。

「結婚し、出産を機に退職し、家事・育児に余裕ができたなら再就職する」という再就職型が最も高く 30.6%で、就労継続型（「結婚しないで働き続ける」＋「結婚し、子どもを持つ、持たないにかかわらず働き続ける」＋「結婚し、出産したら育児休業した後、職場に復帰する」）は 28.3%である。

一方、実際の生き方は、「結婚し、出産を機に退職し、家事・育児に余裕ができたなら再就職する」16.1%、「結婚し、出産を機に退職し、家事・育児に専念する」が 11.2%、「結婚し、出産をし、家事・育児に余裕ができてから初めて就職する」が 9.5%、「結婚し、子どもを持つ、持たないにかかわらず働き続ける」が 9.1%である。

2-5. 子どもに望む生き方（問 19）＜図 2-15＞

■男女ともに、女の子には「家族や周りの人たちと円満に暮らす」ことを望む割合が高い

子どもの将来の生き方についてたずねた。

「女の子」の将来については、「家族や周りの人たちと円満に暮らす」が突出して高く、女性 56.4%・男性 50.5%。ついで、「人間性豊かな生活をする」が女性 32.3%・男性 32.1%、「本人の意思に任せる」が女性 26.3%・男性 24.2%である。

■男女ともに、男の子には「経済的に自立した生活をする」ことを望む割合が高い

一方、「男の子」の将来については、「経済的に自立した生活をする」が突出して高く、女性 62.1%・男性 50.1%である。ついで、「家族や周りの人たちと円満に暮らす」が女性 25.3%・男性 21.1%、「本人の意思に任せる」が女性 24.2%・男性 26.1%となっている。前回調査と比較すると、ほぼ同様の結果となっている。

2-6. 男女平等を進めるために小・中学校で取組むこと（問 20）＜図 2-17＞

■「進路指導は性別によってかたよることなく行い、個人の能力、個性、希望を大事にする」割合は男女ともに 50%を超える

小学校・中学校での男女平等の取り組みで重要なものについてたずねた。

選択率の高いのは、「進路指導は性別によってかたよることなく行い、個人の能力、個性、希望を大事にする」（女性 62.5%・男性 55.3%）、「家庭科教育などにおいて、男女が平等に家庭の責任を果たすことの大切さを教える」（女性 50.3%・男性 40.8%）、「男女平等の意識を育てる授業をする」（女性 31.9%・男性 39.3%）である。

3. 男女の地位に関する意識について

3-1. 各分野における男女の地位の平等感（問 21）＜図 3-1＞

■就労に関する分野で、「男性が優遇」とする割合が女性 80%弱・男性 70%弱

社会におけるさまざまな分野で、男女は平等になっているかをたずねた。

＜男性が優遇＞（「男性が優遇されている」＋「どちらかといえば男性が優遇されている」）の割合が高いのは、『雇用の機会や働く分野』で女性 78.5%・男性 67.5%、『職場（賃金や待遇など）』で女性 78.0%・男性 67.9%である。

また、すべての分野で＜男性が優遇＞の割合は、男性よりも女性の方が高くなっている。

特に、「政治・経済活動への参加」、「法律や制度」、「家庭生活の場」では 20 ポイント前後の開きがある。

「平等になっている」の割合が 50%を超えている分野は、女性では「学校教育の場」、男性では「学校教育の場」、「地域活動、社会活動への参加」である。

3-2. 固定的な性別役割分担意識（問 22）＜図 3-13＞

■男性では「男は仕事、女は家庭」という考え方に「同感する」割合が高い

「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」という考え方についてたずねた。

女性の場合は、＜同感グループ＞（「同感である」＋「どちらかといえば同感である」）が 43.8%、＜同感しないグループ＞（「同感しない」＋「どちらかといえば同感しない」）が 39.7%で、ほぼ同程度の割合である。

男性の場合は、＜同感グループ＞が 55.9%で、＜同感しないグループ＞は 25.1%。男女で比較すると、男性の方が＜同感グループ＞の割合が 12.1 ポイント高くなっている。

■前回から「同感しない」割合が減っている

前回調査では、女性の場合は、＜同感グループ＞44.1%、＜同感しないグループ＞53.5%。男性の場合は、＜同感グループ＞58.2%、＜同感しないグループ＞40.4%であった。

これを今回調査と比較すると、男女ともに＜同感グループ＞の割合はほとんど変化がないものの、＜同感しないグループ＞の割合が女性では 13.8 ポイント、男性では 15.3 ポイント減っている。

3－3. 固定的な性別役割分担意識に「同感する」理由（問 22-1）＜図 3－17＞

■固定的な性別役割分担意識に同感する理由は「男女で違う役割があると思うから」が大半を占める

固定的な性別役割分担意識に「同感する」理由をたずねた。

「男女で違う役割があると思うから」（女性 72.5%・男性 68.5%）が大半を占めている。ついで、「子どもの頃からそのように教育を受けてきたから」が女性 13.4%・男性 14.2%、「社会の風潮・慣習としてそうなっていると感じるから」が女性 11.5%・男性 15.2%である。

3－4. 固定的な性別役割分担意識に「同感しない」理由（問 22-2）＜図 3－19＞

■固定的な性別役割分担意識に同感しない理由は「社会の風潮・慣習としてそうなっていると感じる」が男女で 50%前後

固定的な性別役割分担意識に「同感しない」理由をたずねた。

「社会の風潮・慣習としてそうなっていると感じるから」が女性 43.7%・男性 50.8%。「男女で役割を決めるのはきゅうくつだから」が女性 33.1%・男性 33.8%である。

特に、「男女で役割を決めるのはきゅうくつだから」は、男性の 30 歳代（54.5%）、男性の 30 歳未満（50.0%）、女性の 30 歳代（46.3%）で高くなっている。

4. 健康や地域活動、老後の暮らしについて

4－1. 生活の中でのストレス（不安や悩み）（問 23）＜図 4－1＞

■生活の中でのストレスは、男女ともに「老後の生活」「経済的なこと」

生活の中でのストレスの度合いについてたずねた。

男女ともに「老後の生活（経済や健康）」と「経済的なこと」の割合が 70%前後と極めて高くなっている。

また、男女で割合の違いが大きいのは、「家事の負担」、「配偶者やパートナー、恋人のこと」で、それぞれ 18.0 ポイント、10.7 ポイント女性の方が高くなっている。

4－2．地域活動への参加状況と参加意向（問 24）＜図 4－8＞

■「地域における趣味・スポーツ・学習の活動」への参加意向は男女ともに2人に1人の割合

地域活動への参加状況と参加意向についてたずねた。

その中で、＜今後参加したい＞（「参加した、している・今後も参加したい」＋「参加したことがない・今後は参加したい」）割合を高い順にみると、「地域における趣味・スポーツ・学習の活動」、「自治会・町内会の活動」、「NPO（非営利団体）やボランティアの活動」である。

一方、男女とも＜今後参加したくない＞割合が最も高いのは「民生委員・市政協力委員など公的な立場での活動」で男女ともに60%を超えている。

年齢層でみると、30歳未満では、これまでは参加していない割合が高いものの今後は参加したいとする傾向が強い。

4－3．地域活動へ参加したくない理由（問 24-1）＜図 4－14＞

■地域活動に参加したくない理由は、女性では「人間関係がわずらわしいから」、男性では「あまり関心がないから」の割合が高い

「今後は（も）参加したくない」と答えた女性 578 人・男性 383 人にその理由をたずねた。

女性の理由は、「人間関係がわずらわしいから」、「参加するきっかけがないから」、「あまり関心がないから」の割合が高くなっている。

男性では、「あまり関心がないから」、「仕事が忙しいから」、「人間関係がわずらわしいから」の割合が高くなっている。

また、「仕事が忙しいから」では男性の方が 11.2 ポイント、「家事・育児・介護で忙しいから」では女性の方が 17.8 ポイント高くなっている。

年齢層でみると、女性の 30 歳未満では「参加するきっかけがないから」が 50%を超えている。男性の 40 歳代では「仕事が忙しいから」が 50%を超えている。

4－4．老後の生活の不安（問 25）＜図 4－16＞

■「健康で過ごせるか」と「経済的にやっていけるか」が老後の2大不安

老後の生活への不安についてたずねた。

「健康で過ごせるか」（女性 70.3%・男性 66.0%）、「経済的にやっていけるか」（女性 62.0%・男性 58.2%）の割合が、男女ともに50%を超えて高い。ついで、「病気や寝たきりになったとき、世話を頼める人がいるか」（女性 40.3%・男性 44.1%）である。

4-5. 老後にやってみたいこと（問 26）＜図 4-18＞

■老後にやってみたいことは「趣味の活動」「旅行」

老後をいきいきと暮らすためにやってみたいことをたずねた。

女性の上位 3 位は、「趣味の活動」（59.0%）、「旅行」（57.8%）、「家族との団らん」（40.4%）である。

男性の上位 3 位は、「趣味の活動」（53.2%）、「旅行」（48.0%）、「夫婦の団らん」（37.9%）である。また、「働くこと」「スポーツ」「ボランティア活動」「自治会・町内会の活動」「夫婦の団らん」では女性よりも選択率が高い。

4-6. 「男もつらい」と感じることの有無と「男もつらい」と感じる理由（問 27、27-1）

＜図 4-20、図 4-22＞

■「男もつらい」と感じる男性は 57.3%

男性に対して「男もつらい」と感じるかどうかをたずねた。

その結果は、「ある」（57.3%）が「ない」（31.9%）のほぼ 2 倍となっている。

年齢層でみると、「ある」の割合が最も高いのは 40 歳代で、72.5%。ついで 50 歳代 68.3%、30 歳代 66.1%である。

その理由を割合の高い順にみると、「仕事の責任が大きい、仕事できて当たり前と言われる」（36.1%）、「なにかにつけ『男だから』『男のくせに』と言われる」（30.1%）、「自分のやりたい仕事を自由に選べないことがある」（29.4%）、「妻子を養うのは男の責任だと言われる」（27.7%）である。

4-7. 女性の心とからだの健康を保つために必要な取り組み（問 28）＜図 4-24＞

■「安心して出産にのぞむための検診・相談」については約 40%が<知っている>

女性の回答者に、東大阪市の女性の心とからだの健康へ取り組みの認知度をたずねた。

<知っている>（「よく知っている」＋「聞いたことがある」）の割合が最も高いのは「安心して出産にのぞむための検診・相談」（41.6%）で、ついで、「食生活や健康づくりに関する情報提供」（39.3%）、「女性のための悩みや不安（DVを含む）に対する相談」（37.6%）である。

また、利用したことがある割合は「安心して出産にのぞむための検診・相談」が最も高いものの、その割合は 4.8%にとどまっている。

5. 人権の尊重について

5-1. 女性の人権が尊重されていないと感じること（問 29）＜図 5-1＞

■総じて女性の人権に対する尊重の度合いは高くない

女性の人権が尊重されていないことがら（9項目）を列挙し、尊重されていないと感じるものをたずねた。

最も選択された「痴漢やレイプなどの性犯罪」においても女性 56.8%・男性 38.5%である。

また、すべての項目で女性の方が男性より選択率が高く、特に「痴漢やレイプなどの性犯罪」（女性 56.8%・男性 38.5%）、「性風俗営業、売買春、援助交際」（女性 37.9%・男性 20.1%）では17ポイント以上の差がある。

5-2. 配偶者やパートナー、恋人からの暴力（DV）（問 30）＜図 5-2＞

■女性が「大声でどなったり、物を壊したりされた」経験は17.0%

「配偶者やパートナー、恋人からの暴力」の経験についてたずねた。

＜されたことがある＞（「何度もされた」＋「1、2度された」）割合で高いのは、女性の場合、「大声でどなったり、物を壊したりする」が17.0%、「平手で打つ」が14.9%、『誰のおかげで生活できるんだ』、『食わせてやっている』と言う」が12.3%、「こぶしでなぐったり、足で蹴る」が10.5%である。男性の場合は、「平手で打つ」が最も高く、6.6%である。

その逆に、＜したことがある＞（「何度もした」＋「1、2度した」）割合で高いのは、男性の場合は、「平手で打つ」で12.6%、「大声でどなったり、物を壊したりする」で11.6%である。女性の場合は、「平手で打つ」が最も高く、5.2%である。

5-3. DV被害を受けた後の行動（問 31）＜図 5-3＞

■被害を受けた後は「二人で話し合った」が最も高い

配偶者やパートナー、恋人からの暴力（ドメスティック・バイオレンス（DV））後の対処の仕方についてたずねた。

「二人（夫と妻、パートナー・恋人同士）で話し合った」割合が最も高く、女性 34.0%・男性 57.4%である。ついで、女性の場合は、「友人・知人に相談した」が22.9%、「親や兄弟姉妹、親類に相談した」が22.5%である。

また、「どこにも相談しなかった、また、相談できなかった」は、女性 30.5%・男性 21.6%で、公的、民間を問わず支援機関に相談、避難した割合は極めて低くいずれも5%に満たない。

5-4. DV被害を受けた後にどこにも相談しなかった（または、できなかった）理由（問32）

<図5-4>

■「相談するほどの事ではないと思った」が男女ともに50%を超える

DV被害を受けた後に相談しなかった、あるいはできなかった理由をたずねた。

男女ともに「相談するほどの事ではないと思った」割合が高く、女性52.5%・男性62.5%である。

女性の場合は、「自分さえ我慢すればやっていけると思った」28.8%、「相談しても無駄だと思った」が21.3%となっている。

男性の場合は、「自分にも悪いところがあると思った」が25.0%。

「どこに（誰に）相談したらよいのかわからなかった」は女性6.3%・男性3.1%である。

6. 男女共同参画社会の形成に関する意識について

6-1. 法律や言葉、東大阪市の取り組みの認知度（問33）<図6-1>

■認知度の高いのは、「男女雇用機会均等法」と「ドメスティック・バイオレンス（DV）」

男女共同参画に関わる法律や言葉、東大阪市での取り組みについての認知度をたずねた。

<知っている>（「よく知っている」＋「聞いたことがある」）の割合が高いのは、「男女雇用機会均等法」、「ドメスティック・バイオレンス（DV）（配偶者や恋人など親しい人からの暴力）」で約60%、ついで「育児・介護休業法」で約50%である。

しかし、「男女共同参画推進プランひがしおおさか21」「東大阪市男女共同参画推進条例」など東大阪市の取り組みについては、20%以下となっている。

6-2. 「男女共同参画」を推進するために参加したい活動（問34）<図6-2>

■男女共同参画を推進するために参加したい活動は「特にない・わからない」が男女ともに50%を超える

男女共同参画を推進するために参加したい活動についてたずねた。

「特にない・わからない」が男女ともに50%（女性50.6%・男性55.3%）を超えている。

ついで、女性の場合は「女性の生き方に関する情報提供や交流の場、相談、教育などの活動に参加する」（13.3%）、「高齢者や障害者の介助のための活動に参加する」（12.9%）、「子育て支援に関する活動に参加する」（12.4%）の割合が高くなっている。

男性の場合は、「高齢者や障害者の介助のための活動に参加する」（11.4%）、「男女の平等と相互の理解や協力についての学習会を開催したり、参加したりする」（11.2%）の割合が高い。